

# 家畜衛生週報

ANIMAL HYGIENE WEEKLY

No.3925 農林水産省消費・安全局 畜水産安全管理課、動物衛生課 2026. 10. 19

- ・英国からの生きた家きん、家きん肉等の輸入一時停止措置について…………… 321
- ・愛媛県における豚熱の患畜の確認（国内106例目）及び  
「農林水産省豚熱・アフリカ豚熱対策本部」の持ち回り開催について…………… 322
- ・第66回全国家畜保健衛生業績発表会演題（秋田県）…………… 323
- ・2026年 第16回家畜感染症学会学術集会のご案内…………… 326
- ・野生動物と牛の飼養衛生管理ネットワーク in HOKKAIDO 第3回ウェブセミナーのご案内…………… 328

## ☆英国からの生きた家きん、家きん肉等の輸入 一時停止措置について

（令和8年10月6日付けプレスリリース）

農林水産省は、令和8年10月5日（月曜日）、英国ウェスタンアイルズ州から輸入される生きた家きん、家きん肉等について、輸入一時停止措置を講じました。

### 1. 経緯

英国ウェスタンアイルズ州の家きん飼養施設において、高病原性鳥インフルエンザ（H5亜型）の発生が確認された旨、英国家畜衛生当局から発表がありました。

### 2. 対応

本病の我が国への侵入防止に万全を期すため、令和8年10月5日（月曜日）に英国ウェスタンアイルズ州からの生きた家きん、家きん肉等の輸入を一時停止（※）しました。

※発生国又は地域から家きん肉等の輸入を停止するのは、我が国で飼養されている生きた家きんがウイルスに感染することを防止するためであり、食品衛生のためではありません。

（参考）英国からの生きた家きん、家きん肉等の輸入実績

|           | 2023年       | 2024年       | 2025年       |
|-----------|-------------|-------------|-------------|
| 生きた家きん（羽） | -           | 6,906       | 198,654     |
| （日本の総輸入量） | (255,166)   | (306,325)   | (438,309)   |
| 家きん肉（トン）  | -           | 0.4         | 29.4        |
| （日本の総輸入量） | (1,079,290) | (1,159,638) | (1,139,574) |
| 家きん臓器（トン） | -           | -           | -           |
| （日本の総輸入量） | (325)       | (323)       | (211)       |
| 家きんの卵（トン） | -           | -           | -           |
| （日本の総輸入量） | (40,510)    | (24,983)    | (34,076)    |

出典：生きた家きんについては動物検疫所「動物検疫年報」より、家きん肉、家きん臓器、家きん卵については財務省「貿易統計」より集計

これまでの生きた家さん、家さん肉等の輸入停止措置の状況等については、次のページより確認いただけます。

動物検疫所：生きた家さん・家さん肉等の輸入を一  
時停止している国：動物検疫所

[<https://www.maff.go.jp/aqs/topix/im/hpai.html>]

## ☆愛媛県における豚熱の患畜の確認（国内106例 目）及び「農林水産省豚熱・アフリカ豚熱防 疫対策本部」の持ち回り開催について （令和8年10月7日付けプレスリリース）

本日、愛媛県大洲市の養豚農場において家畜伝染病である豚熱の患畜が確認されたことを受け、農林水産省は「農林水産省豚熱・アフリカ豚熱防疫対策本部」を開催し、今後の対応方針について決定しました。

現場及び周辺地域にも本病のウイルスが存在する可能性があり、人や車両を介して本病のまん延を引き起こすおそれがあります。現場及び周辺地域での取材は、厳に慎むよう御協力をお願いいたします。

### 1. 発生農場の概要

所在地： 愛媛県大洲市 飼養状況：約4,000頭

### 2. 経緯

- (1) 令和8年10月6日（火曜日）、愛媛県は、大洲市の農場において異状が見られるとの通報があったため、当該農場に立ち入り、検査を実施しました。
- (2) 愛媛県の検査により豚熱の疑いが生じたため、農研機構動物衛生研究部門（注）で精密検査を実施したところ、10月7日（水曜日）、豚熱の患畜であることが判明しました。

（注） 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究部門：国内唯一の動物衛生に関する研究機関

### 3. 今後の対応

「豚熱に関する特定家畜伝染病防疫指針」等に基づき、次の措置について万全を期します。

- (1) 当該農場の飼養豚の殺処分及び焼埋却等の必要な防疫措置を迅速かつ的確に実施します。
- (2) 感染経路等の究明のため、国の疫学調査チームを派遣します。
- (3) 本病の早期発見及び早期通報の徹底を図ります。
- (4) 関係府省と十分連携を図るとともに、生産者、消費者、流通業者等への正確な情報の提供に努めます。
- (5) 農場の消毒や野生動物の農場への侵入防止等の飼養衛生管理基準の遵守に関する指導を徹底します。
- (6) 飼養豚への適時・適切なワクチン接種を徹底します。

### 4. 農林水産省豚熱・アフリカ豚熱防疫対策本部

日時：令和8年10月7日（水曜日）（持ち回り開催）

### 5. その他

- (1) 豚熱は、豚、イノシシの病気であり、人に感染することはありません。
  - (2) 現場での取材は、本病のまん延を引き起こすおそれがあること、農家の方のプライバシーを侵害するおそれがあることなどから厳に慎むよう御協力をお願いいたします。
- 特に、ヘリコプターやドローンを使用する取材は防疫作業の妨げとなるため、厳に慎むようお願いいたします。

(3) 今後とも、迅速で正確な情報提供に努めますので、生産者等の関係者や消費者は根拠のない噂などにより混乱することがないように、御協力をお願いいたします。

## ☆第66回全国家畜保健衛生業績発表会演題（秋田県）

### 県内の牛鼻炎Aウイルスが関与した牛呼吸器病症候群

秋田県中央家畜保健衛生所  
中村南斗、佐藤 龍

#### 1. はじめに

牛呼吸器病症候群（以下BRDC）は輸送や環境変化に伴うストレス感作やウイルス、細菌等の病原微生物による感染が複雑に絡み合って発生する。BRDCにおける主要な病原体は、ウイルスにおいては牛ヘルペスウイルス（以下BHV1）や牛コロナウイルス（以下BCV）等、細菌は *Mannheimia haemolytica*（以下Mh）や *Mycoplasma bovis* 等があげられる。BRDCは牛の産業界において経済的損失が大きな疾病であり、発症した場合には早期の治療が重要である。

また、牛鼻炎Aウイルス（以下BRAV）についてもBRDCに関与すると考えられている。BRAVはピコルナウイルス科アフトウイルス属に属する1本鎖RNAウイルスで牛ライノウイルス病の原因ウイルスである。抗原性に基づきBRAV1とBRAV2の2つの血清型に分類される。単独感染での病原性は低いが、海外の報告では無症状牛に比べBRDC発症牛で検出率が有意に高いというデータが示されている。他の病原体との複合感染時の病態は不明である。遺伝子検査は令和3年に小泉が報告した手法により検出率が向上した。ウイルス分離はCPE発

現が弱く困難な場合が多い。

#### 2. 発生概要

ホルスタイン種の搾乳牛、育成牛及び子牛を計55頭飼養する自家産一貫経営酪農場で、令和5年1月、発熱と下痢および咳が牛群にまん延した。発症から2週間で搾乳牛2頭と育成牛2頭及び子牛1頭の計5頭が死亡し、農場全体の約9.1%にのぼる死亡率となった。普段、牛の導入はないものの、発症1週間前に子牛市場に上場後売却できず持ち帰った経緯がある。家保が立入時、症状を呈する6頭（No. 1～6）の血清・全血・鼻腔スワブ・糞便を採材し病性鑑定を実施した。なお、呼吸器病および下痢関連のワクチンは未接種であった。

#### 3. 材料及び方法

ウイルス検査の遺伝子検査はA～C群ロタウイルス、牛トロウイルス、BCV、牛ウイルス性下痢ウイルス、牛パラインフルエンザウイルス3型、BHV1、牛RSウイルス、牛アデノウイルス、D型インフルエンザウイルス、BRAVを対象に実施した。特にBCVについては鼻腔スワブを菅野らの手法、糞便を福田らのマルチプレックスPCRの手法を用い、BRAVは小泉の手法を用いた。

ウイルス分離検査については鼻腔スワブ懸濁PBSを用いて行い、BRAVについてはMDBK細胞に接種し33℃で3代回転培養、BCVについてはHRT18細胞に接種し37℃で3代静置培養を実施した。

中和試験はプレ血清と4週間後に採材したポスト血清を用いた。BRAVは動衛研より分与されたM-17株(BRAV1)またはH-1株(BRAV2)と34℃で90分感作した。その後MDBK細胞を106個/mlで添加し34℃で1週間培養した。希釈と培養は7.5%(w/v)NaHCO<sub>3</sub>を2%(v/v)添加したTPB加無血清EMEM培地を用いた。BCVについては本事

例でのBCV分離株を各検体と感作しHRT18細胞を添加した後、37℃、5%CO<sub>2</sub>条件下で1週間培養した。

培養検査については鼻腔スワブを5%SB-TSA(炭酸ガス)、マッコンキー(好気)、NK寒天培地(炭酸ガス)、NK液体培地(好気)で37℃培養、糞便についてはDHL(好気)、ESサルモネラⅡ(好気)で定量培養した。また、HTT培地およびRV培地に接種し42℃で選択増菌培養後、DHL培地(好気)およびESサルモネラⅡ培地(好気)へ接種し37℃培養を行った。遺伝子検査は培養検査における分離菌のうち、性状等に応じてMhの菌種特異的PCRおよびMh主要血清型推定PCRを実施した。また、増菌培養後Mycoplasma属菌の菌種特異的PCRを実施した。

#### 4. 結果

##### (1) ウイルス検査

遺伝子検査ではBRAV特異遺伝子を4頭(No. 1, 2, 4及び6)とBCV特異遺伝子を4頭(No. 1, 2, 5及び6)から検出した。その他遺伝子検査を実施したウイルスの特異遺伝子は検出されなかった。ウイルス分離についてはBRAVを分離できず、2頭(No. 2及び6)からBCV

を分離した。中和試験についてはBRAV1が6頭、BRAV2が5頭(No. 1～4及び6)で4倍以上の有意上昇をし、特にBRAV1の上昇幅が高い結果となった(表1)。BCVについてはプレ、ポスト血清ともに高い抗体価であったものの、有意上昇が4頭(No. 1～4)で確認された。これらの結果から全頭を牛ライノウイルス病および牛コロナウイルス病と診断した。

##### (2) 細菌検査

全頭の鼻腔スワブからMh血清型6型を分離した。また、遺伝子検査ではMycoplasma bovirhinis(以下Mb)特異遺伝子を3頭(No. 3～5)から検出した。糞便からは有意菌分離陰性であった。

##### (3) 令和7年までのBRAV検出状況

本事例以降も県内5事例でBRAVが検出された(表2)。いずれも1才未満の子牛の発症が多く、呼吸器症状は発咳や鼻汁漏出等であった。また、発生時期は1～4月であった。5事例のうちA、D、Eの3事例についてはBRAV遺伝子陽性になったことに加えて抗BRAV抗体も有意上昇した。この3症例はパスツレラやマイコプラズマ、BCV等との混合感染であると診断された。

表1 抗BRAV中和抗体検査結果

| No. | 月齢 | 中和試験  |      |       |      |      |      |
|-----|----|-------|------|-------|------|------|------|
|     |    | BRAV1 |      | BRAV2 |      | BCV  |      |
|     |    | pre   | post | pre   | post | pre  | post |
| 1   | 25 | 4     | 256  | 8     | 32   | 128  | 1024 |
| 2   | 22 | 16    | 256  | 8     | 64   | 256  | 1024 |
| 3   | 3  | 8     | 128  | 8     | 32   | 128  | 512  |
| 4   | 4  | 2     | 64   | 8     | 32   | 256  | 1024 |
| 5   | 5  | 2     | 256  | 32    | 32   | 1024 | 2048 |
| 6   | 20 | 4     | 128  | 4     | 128  | 512  | 1024 |

表2 令和7年までのBRAV検出状況

| 農家 | 検査年月     | 検体数 | 飼養形態           | 飼養頭数 | 採材月齢 | 症状                                 | 検査材料                     | 診断<br>(頭数)                                                             | BRAV<br>PCR<br>陽性<br>頭数 | 中和試験        |      |          |            |       |          | 同時期の<br>死亡診断                        |
|----|----------|-----|----------------|------|------|------------------------------------|--------------------------|------------------------------------------------------------------------|-------------------------|-------------|------|----------|------------|-------|----------|-------------------------------------|
|    |          |     |                |      |      |                                    |                          |                                                                        |                         | BRAV1(M-17) |      |          | BRAV2(H-1) |       |          |                                     |
|    |          |     |                |      |      |                                    |                          |                                                                        |                         | GM          |      | 有意<br>上昇 | GM         |       | 有意<br>上昇 |                                     |
|    |          |     |                |      |      |                                    |                          |                                                                        |                         | プレ          | ポスト  |          | プレ         | ポスト   |          |                                     |
| A  | R5<br>1月 | 6   | 黒毛<br>繁殖       | 70   | 2~6  | 発咳・軟便<br>1頭1週後死亡                   | 鼻腔<br>スワブ<br>糞便<br>全血・血清 | 牛ライノウイルス病(5)<br>牛バスタツレラ症(4)<br>ヒストフィルスソムニ感染症(1)                        | 6/6                     | 10.6        | 16.0 | 0/5      | 8.0        | 168.9 | 5/5      | 1~2月で<br>20ヶ月齢1頭<br>3ヶ月齢4頭<br>肺炎    |
|    |          | 1   |                |      | 3    | 2週間から<br>発咳・下痢<br>抗生剤で一時的<br>回復後死亡 | 主要<br>5臓器                | 牛バスタツレラ症<br>牛マイコプラズマ肺炎                                                 | 0/1                     | NT          | NT   | NT       | NT         | NT    | NT       |                                     |
| B  | R5<br>2月 | 4   | 黒毛<br>肥育       | 350  | 8~9  | 導入直後<br>鼻汁・発咳<br>39.5℃             | 鼻腔<br>スワブ                | 牛バスタツレラ症(3)<br>牛バスタツレラ(マンヘミア)症(1)                                      | 1/4                     | NT          | NT   | NT       | NT         | NT    | NT       | なし                                  |
| C  | R5<br>3月 | 3   | 黒毛<br>繁殖       | 115  | 4~7  | 粘度の高い<br>鼻汁                        | 鼻腔<br>スワブ                | 牛コロナウイルス病(2)<br>ヒストフィルスソムニ感染症(1)<br><i>Mycoplasma bovirhinis</i> 分離(2) | 1/3                     | NT          | NT   | NT       | NT         | NT    | NT       | なし                                  |
| D  | R7<br>1月 | 9   | 黒毛<br>繁殖<br>肥育 | 95   | 5~6  | 発咳再発<br>40℃                        | 鼻腔<br>スワブ<br>・<br>血清     | 牛バスタツレラ症(5)<br>牛ライノウイルス病(3)<br>牛コロナウイルス病(1)<br>牛マイコプラズマ肺炎(1)           | 2/9                     | 1290        | 1505 | 1/9      | 47.0       | 80.6  | 3/9      | 15日後<br>1ヶ月齢<br>1頭肺炎                |
| E  | R7<br>4月 | 5   | 黒毛<br>繁殖<br>肥育 | 231  | 1~3  | 発咳<br>水様性下痢                        | 鼻腔<br>スワブ<br>・<br>血清     | 牛マイコプラズマ肺炎(5)<br>牛コロナウイルス病(4)<br>牛ライノウイルス病(1)<br>牛バスタツレラ症(1)           | 2/5                     | 27.9        | 21.1 | 0/5      | 42.2       | 36.8  | 1/5      | 4日後<br>4ヶ月齢1頭肺炎<br>11日後<br>2ヶ月齢1頭腸炎 |

BRAVのウイルス分離はいずれも陰性であった。また、3事例は同時期に子牛を中心にした肺炎による死亡が確認された。

#### (4) BRAV浸潤状況調査

初発農場の病性鑑定前後の余剰血清を用いて計5回、延べ247検体の抗BRAV中和抗体価の動態調査を行った。その結果、中和抗体保有率は令和4年6月の血清で1型が66.7%、2型が97.8%であったが、病性鑑定以降は1型と2型ともに100%となった。各採材時期の中和抗体価分布と幾何平均(以下GM)の推移を確認すると、病性鑑定を境にして1型、2型のGMが上昇し、1型が大きく上昇した(図1)。

年齢別にGMの推移をみると1型は1~4才まで大きく上昇したものの、2型は3才、4才の個体が大きく上昇した(図2, 3)。

また、中央家保管内で飼養する牛の余剰血清より選抜した693検体を用いて抗体検査を実施した。そ

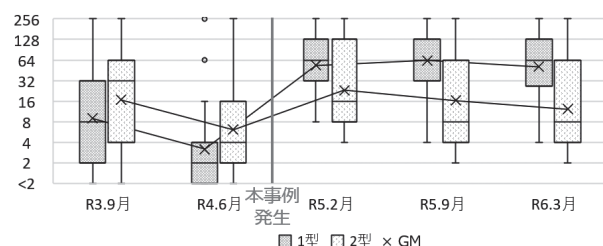


図1 各採材時期の中和抗体分布と幾何平均

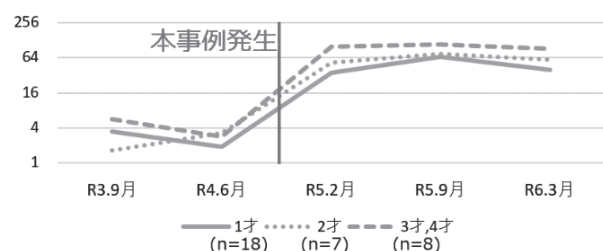


図2 抗BRAV1中和抗体GM推移

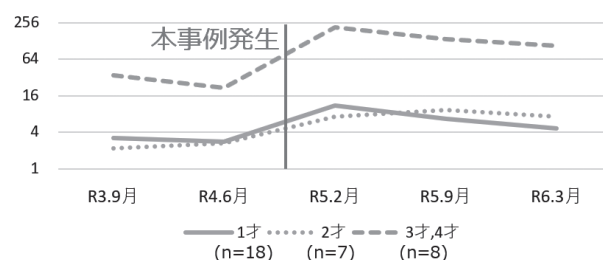


図3 抗BRAV2中和抗体GM推移

の結果、中和抗体保有率は1型が98.6%、2型が99.4%と非常に高率になった。年齢別のGMを比較すると1型、2型ともに年齢が高くなるにつれてGMが高くなる傾向があった(図4)。

飼養規模別に比較したところ、規模の大小による傾向はなかった。酪農家については外部導入の有無を比較すると自家産一貫経営農場の個体は抗体価が低い個体が多くみられた(図5)。

## 5. まとめと考察

県内では令和5～7年の間に4事例でBRAVがBRDCに関与したと思われる事例があった。1才未満の発症事例が中心であったが、これは4～10ヶ月齢で移行抗体が消失し感染リスクが高まるとする永野らの報告(平成元年)とも合致する結果となった。発生時期に関しては、ヒトのライノウイルス感染症は春季および秋季に多発することが知られている。一方、今回の検出事例が冬から春に集中したのはBRAV単独感染では明瞭な症状が出なかったものの、他の病原体との混合感染によって症状が顕在化したためであると推察された。

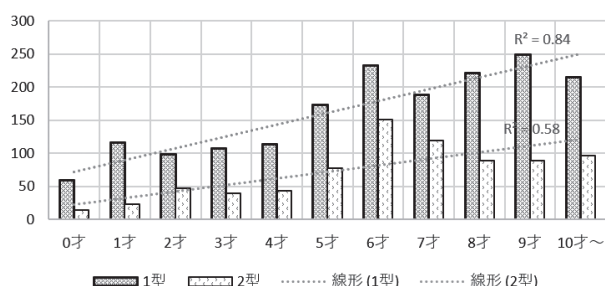


図4 年齢別抗BRAV中和抗体GM

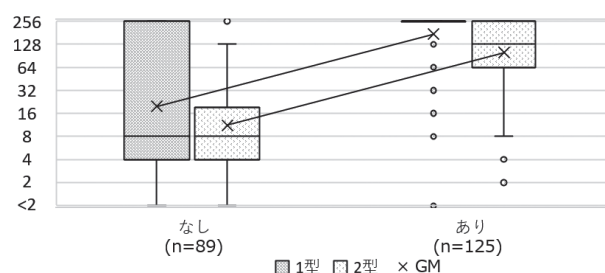


図5 酪農家外部導入牛有無別の抗体価分布

初発農場での追跡調査では1型抗体価の有意な上昇が認められ、農場内での広範な感染拡大が示唆された。2型抗体価についても全体的に上昇傾向にあり、既感染個体による追加免疫の獲得が推測された。管内農家を対象にした抗体調査の結果、抗体保有率は高率であり、山下らの報告(昭和60年)を上回る結果となった。加齢に伴いGMが高くなる傾向があることから、本ウイルスは令和2年以前より広く浸潤しており、多くの個体が生涯にわたって複数回感染していると推察された。自家産一貫経営農場では、外部導入によるBRAV持込みリスクに留意が必要である。

今後の課題として、抗体保有牛においてもPCR陽性が確認されたことから、感染防御能を発揮する抗体価について検証が必要である。BRAVは他の要因と相乗的に作用しBRDCを重症化させていると考えられる。今後、BRDC疑い事例では積極的にBRAV検査を実施し、さらなる症例の蓄積を図りたい。

稿を終えるにあたり抗体保有状況調査のためにBRAV M-17株とH-1株を分与いただいた国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究部門森岡一樹氏、ならびにご助言をいただいた埼玉県中央家畜保健衛生所小泉舜史郎氏に深く謝意を表する。

## ☆2026年 第16回家畜感染症学会学術集会のご案内

テーマ：牛伝染性リンパ腫ウイルス制御への

アプローチ —基礎研究から現場実装まで—

日 時：2026年12月5日(土)、14:00～18:00

(受付開始：13:30～)

6日(日)、9:30～16:30

(受付開始：9:00～)

会 場：大阪公立大学i-site なんば

(〒556-0012 大阪市浪速区敷津東2-1-41)

<https://www.omu.ac.jp/isite/>

形 式：対面およびZoom配信（ハイブリッド）

大会長：向本 雅郁（大阪公立大学名誉教授）

参加費：正会員、賛助会員：5,000円、

非会員：7,000円、学生：無料

事前登録、一般口演登録

（締切：2026年11月21日（土））：

<https://kachikukansen.infotecs.jp/20261205/>

内 容：

【12月5日（土）】

● 開会

向本 雅郁（大阪公立大学名誉教授）

● 第15回最優秀学術賞受賞者講演

・抗菌剤の予防投薬が慣習化した養豚場における  
間欠投与法の活用

遠矢 良平（宮崎県農業共済組合）

● 一般口演（10～12題程度を募集）

● 学会活動報告

● 意見交換会（18：30～20：30（予定）、現地参加のみ）

・アリーズパスタショップ

<https://allyspastashop-namba.owst.jp/>

・参加費：6,000円、学生：3,000円

※ 参加費は当日、会場にてお支払ください。

【12月6日（日）】

● 全国呼吸器アンケートシンポジウム

1) アンケート報告

・子牛呼吸器疾患に関する全国アンケート報告

石川 真悟

（家畜感染症学会事務局、大阪公立大学）

2) 基調講演

・医療における抗菌薬適正使用と獣医療との接点

覺野 重毅

（大阪公立大学 大学院医学研究科 呼吸器内科学）

3) アンケートディスカッション

司 会：石川 真悟

（家畜感染症学会事務局、大阪公立大学）

パネラー：覺野 重毅（大阪公立大学）

阿部 信介（NOSAI宮崎）

前田 洋佑（北里大学）

五嶋 祐介（岩手家保）

上村 涼子（宮崎大学）

叶 有斗（NOSAI鹿児島）

● ランチョンセミナー（公募中）

● 牛伝染性リンパ腫に関するシンポジウム

1) 基調講演

・牛伝染性リンパ腫ウイルス制御へのアプローチ  
—基礎研究から現場実装まで—

間 陽子

（東京大学 大学院農学生命科学研究科）

2) 推奨研究

①牛伝染性リンパ腫ウイルス研究とものづくり

開発による社会実装モデル

関口 敏

（宮崎大学 産業動物防疫リサーチセンター）

②BLVクローナリティ解析による牛伝染性リンパ

腫発症予測法の開発と社会実装への取り組み

岡川 朋弘

（北海道大学 One Health リサーチセンター・株

式会社ファスマック）

③茨城県における牛伝染性リンパ腫ウイルス感

染牛の伝播・発症リスクに関連する各種指標  
の調査成績

藤井 勇紀

（茨城県県北家畜保健衛生所）

3) 総合討論

● 閉会

## ☆野生動物と牛の飼養衛生管理ネットワーク in

## HOKKAIDO

## 第3回ウェブセミナーのご案内

野生動物や牛の飼養衛生管理に関する最新の知見や情報を発信・共有することを通じ、生産現場における家畜の飼養衛生管理の向上に資することを目的として、下記のとおり、第3回ウェブセミナー(Zoom)を開催致します。

- 1 主 催：野生動物と牛の飼養衛生管理ネットワーク in HOKKAIDO
- 2 日 時：2026年11月4日(水) 19:00～20:30
- 3 会 場：オンライン開催(Zoom)
- 4 講演名：「エゾシカをめぐる現状と課題」
- 5 講 師：伊吾田 宏正 先生(酪農学園大学 農食環境学群教授／本ネットワークコアメンバー)
- 6 参加費：無料
- 7 参加申込：本ネットワークのホームページ(HP)にて受付中。詳しくは本ネットワークのHP(※)をご覧ください。下記二次元コードからもアクセスできます。

(※) <https://www.network-hokkaido.com>



## 通 信

10月に入り豚熱が106～108例目と3件続いています。詳しい調査を待つ必要はありますが、発生時期は近いものの、現時点で各事例間の接点は確認されておらず、独立した発生であると推測されます。秋は春と並んで野生イノシシの行動範囲が広がりやすい時期であるとされています。各地における養豚農場のバイオセキュリティの徹底、接種効果を確認しながらの適時適切な飼養豚へのワクチン接種、捕獲強化や経口ワクチン散布等の野生イノシシ対策について、各関係者が連携しながら十分な対応を図っていただくようお願いします。

なお、今回の対応においては、いずれも選択的殺処分が適用されました。一貫農場ベースで換算すれば、これまでの全頭殺処分と比べ、対象頭数は約半分となっており、また、子豚ばかりであることもあり、殺処分作業も1～2日で終了しています。105例目も含め、各事例において事前の想定がしっかりできていたことも、対象個体の特定を含めこうして円滑に進んでいる要因だと感じます。万が一発生した際にどのように整理し、動いていくか、発生予防と併せ、防疫対応を設計する者の十分な想定と関係者との認識共有を事前に図ることが重要と考えられます。

毎週月曜日発行

## 家 畜 衛 生 週 報

編集・発行：農林水産省消費・安全局

畜水産安全管理課、動物衛生課

☎03(3502)8111 内線 4581

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1